

長岡京跡左京第 557 次調査現地説明会資料

遺跡名	長岡京跡左京六条一坊十三町（六条大路、東一坊大路）、雲宮遺跡
所在地	長岡京市神足大張 12-1 他
調査期間	平成 25（2013）年 3 月 4 日～7 月 31 日（予定）
調査面積	1439m ²

はじめに

店舗建設に伴って平成 25 年 3 月 4 日から発掘調査を行っています。これまでに長岡京期の遺構の記録を取り終わり、現在、長岡京期よりも古い時代の遺構を調査中です。今回の現地説明会では主に長岡京期の調査成果について報告します。

見つかった遺構と遺物

〈長岡京期〉

今回の調査地は、長岡京を碁盤の目状に区画している道路の内、東西の六条大路と南北の東一坊大路の大路同士の交差点付近に当たっています。長岡京の大路は幅約 24 m（八丈）の広さがあるため、調査地では六条大路の北側溝と東一坊大路の西側溝の交差部分のみが見つかりました。また北西部では左京六条一坊十三町の宅地の一角が検出されました。

六条大路北側溝 SD25 幅 1～1.5 m、深さ約 0.5 m で、西から東に向かってわずかに広がっています。東一坊大路の西側溝よりも東には延びておらず、東一坊大路の西側溝の排水が優先されていることが判明しました。

これまでに見つかっている大路同士の交差点のうち、一条・二条・三条・四条大路では東西道路の排水が優先されていることが知られていましたが、今回の調査地では南北道路が優先されていることが判明しました。このような道路の優先は自然条件（土地の傾きや湧き水の量など）が大きく関係するものと考えられます。

東一坊大路西側溝 SD17 幅約 2 m、深さ約 0.7 m で、六条大路の交差点を境にして南ではさらに幅が広がり、3～3.5 m となります。底は南に低くなっていて、調査地の北と南では約 0.3 m の高低差があります。条坊側溝の規模としてはかなり広くて深いもので、周辺の水量がかなり多かったのかもしれません。

六条大路北側溝との交差部分のすぐ南側には板状の木材や杭、大きな石が固まっている部分があり、橋のような施設が設けられていたようです。またすぐ横には牛とみられる動物の骨がたくさん出土していて、交差点近くで動物を捧げるおまつりが行われていたようです。他に付け札とみられる木簡も出土しています。交差部分のすぐ北では銅銭がまとまって 10 枚出土していて、これも同じくおまつりに関連するものとみられます。

宅地内溝 SD15・24 溝 SD15 は東一坊大路西側溝の西側約 3 m に掘られた溝で、北側では幅 3.5 m ですが、南に行くにしたがい宅地側の西肩が崩れて広がっています。溝 SD24 も同じく六条大路北側溝の北側約 4 m に掘られていますが、やはり宅地側の肩は不明瞭です。これら溝の南東隅からは六条大路北側溝に向かって幅 1 m の排水溝が掘られていて、数個の大きな石が置かれています。溝の深さは 0.4～0.5 m で、内部からは炭とともに大量の遺物が出土しました。土器類は完全な形になるものも多く、平安京への引っ越しに伴い宅地側から不用物がゴミとして捨てられたものと思われる。

この宅地内溝と条坊側溝の間には本来、柵や塀などの区画するための施設が設けられるはずですが、小さな溝や落ち込み、小穴が見られるのみで、明確な施設はありませんでした。築地が壊された可能性もありますが、溝の中にはそれらしい土は見当たらず、瓦も小片がわずかに出土したのみでした。あるいは築地を作る予定があったものの、平安京へ引っ越しが決まってしまう、そのままになってしまったのかもしれませんが。ちなみにこの部分の小穴からは^{しっぴぼこ}漆皮箱が出土しています。これは動物の皮で箱形を作り、漆を塗って固めたもので、正倉院に多くの類例が残されています。遺跡からの出土は珍しいもので、これも築地が築かれていなかった証ともいえるでしょう。

ところで、この宅地内溝出土遺物の中で注目されるものに^{しっしやかん}漆紗冠があります。全部で 4 点見つかりました。漆紗冠とは目の粗い網状の編み物を袋状に綴じ合わせて、黒漆を塗って仕上げた^{かぶ}冠^{もの}物で、貴族が着用するものでした。主に都を中心に墓などからも見つかりていますが、残りにくいため類例は多くありません。長岡京では宮と左京で 4 例が知られていますが、いずれも小さな断片で、今回のようにある程度形の判るものは初めての出土となります。また一カ所から一度に 4 点も見つかったのは全国的にも珍しい例といえます。

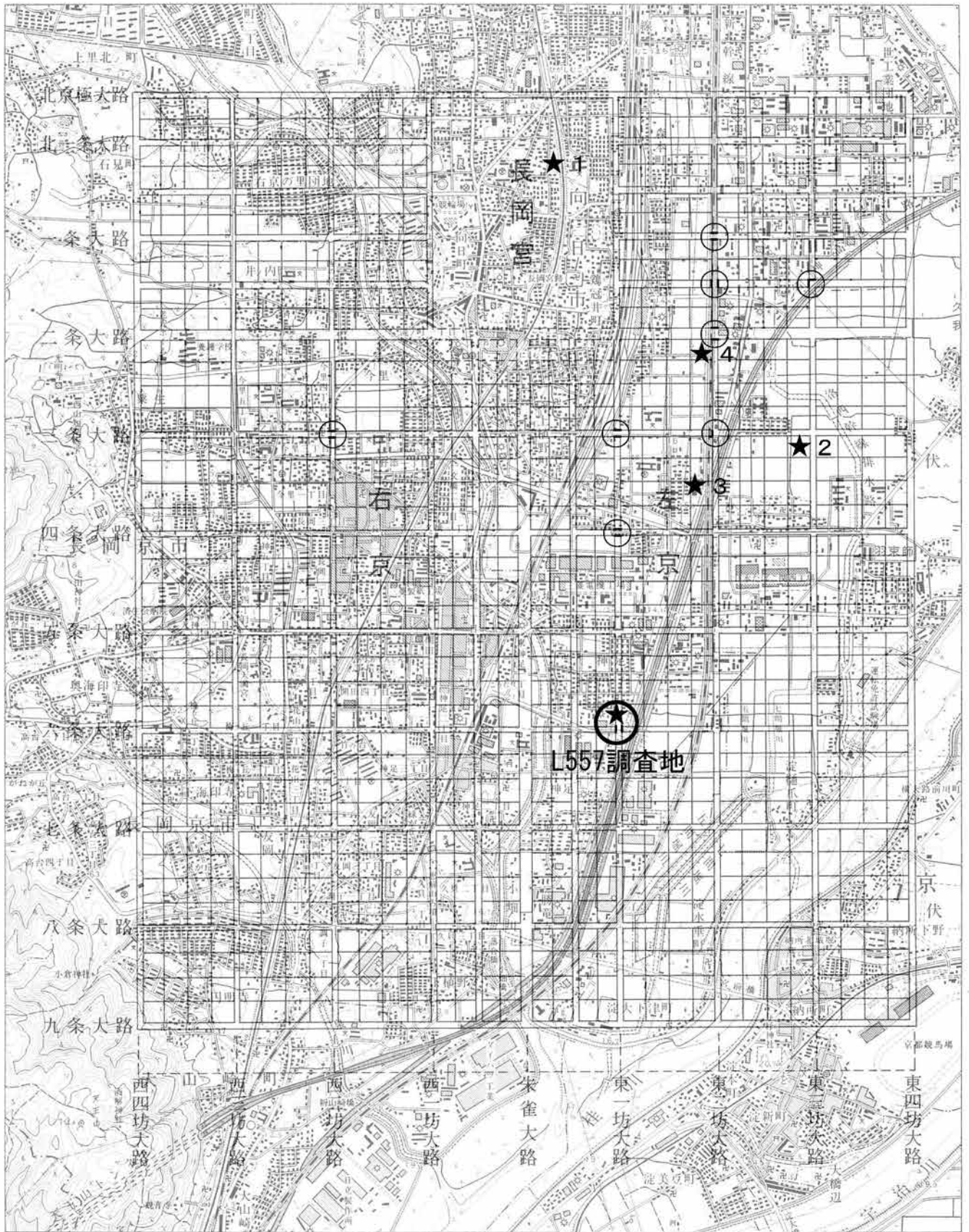
ただし、このことからすぐにここに貴族が住んでいたとはいえないようです。まず六条は都の中ではかなり南で、貴族の住まいにはふさわしくないこと。同時に出土している遺物を見ると、漆皮箱のような高級品もありますが、漆のしみこんだ紙や、漆の容器に使われた壺、漆のパレットとして使用された土器などが多く見られること。文字資料が多くないことなどから、どうやらここには漆製品の工房があったと考えるのが妥当なようです。ここに工房が存在した理由のひとつに官営の市場である「東市」が近かったことがあげられると思います。おそらく材料の調達などに便利がよかったのでしょう。

土坑 SK31 このほかに調査地の北東隅、東一坊大路の路面上から、長岡京期の遺物を含んだ直径 0.8 m、深さ 0.3 m の円形の穴 SK31 が見つかりています。炭が多く混じっていることから、これも平安京への引っ越しの際にゴミを処理した穴とみられます。

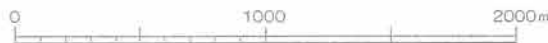
〈下層遺構〉

調査地の東半分、ちょうど東一坊大路の路面に当たる部分を現在掘り下げています。その結果、調査地内を北西から南東方向に蛇行しながら流れる川や掘立柱建物、土器棺墓などが見つかりました。川から出土した土器から、古墳時代の雲宮遺跡に関連するものとみられます。詳しい調査はこれからになりますが、川の周囲には集落が存在したようです。

長岡京条坊復原図



1 : 30,000



○大路交差点検出箇所

★漆紗冠出土地点

図1 発掘調査地の位置 (付：長岡京跡における大路交差点検出箇所・漆紗冠出土地点)

4 Y=-26,350

Y=-26,340

Y=-26,330

Y=-26,320



X=-119,920

X=-119,930

X=-119,940

X=-119,950

X=-119,960

宅地内溝

西側溝

SK31

★4
漆紗冠

SD15

★2

★3

漆紗冠

★1

SD17

漆皮箱

東一坊大路

左京六条一坊十三町

宅地内溝

SD24

銅銭

北側溝

SD25

木簡

橋

獸骨

六条大路

0 10m

図2 長岡京期の検出遺構図 (1/200)



写真1 長岡京期の遺構全景（南から）



写真2 六条大路北側溝 SD25・東一坊大路西側溝 SD17 交差点（南東から）



写真3 東一坊大路西側溝 SD17 交差点付近の橋と獣骨（北から）



写真4 宅地内溝 SD15 遺物出土状況 (西から)



写真5 宅地内溝 SD15 出土漆沙冠 2



写真6 小穴出土漆皮箱（東から）



写真7・8 東一坊大路西側溝SD17出土銅銭（左）と木簡（右）